

◆ 京都大学×河合塾 ◆

「学校と社会をつなぐ調査」(第1回調査) 分析結果報告

京都大学と河合塾は2013年度から、高校2年生の成長を、大学生・社会人になった約10年後まで追跡調査する「学校と社会をつなぐ調査」を開始した。今年7月から9月にかけて、全国8会場で開催された「学校と社会をつなぐ調査 分析結果報告&シンポジウム」について、東京会場の内容の一部をレポートする。

● 新しい時代における ● 学校教育の役割を明らかに

まず、「学校と社会をつなぐ調査」(通称「10年トランジション調査」)とは、どのような目的で実施される調査なのか、簡単に概要を説明しよう。

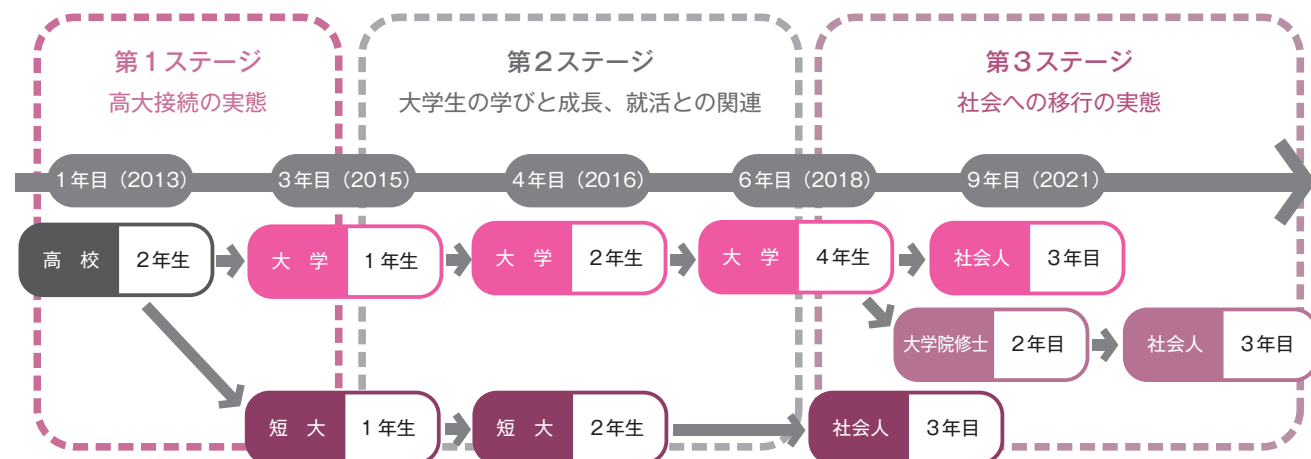
京都大学高等教育研究開発推進センターと公益財団法人電通育英会では、2007年から3年おきに「大学生のキャリア意識調査」という全国調査を実施してきた。その中で明らかになったのは、「主体的に学ぶ力(教室外学習、主体的な学習態度)」「豊かな対人関係や活動性」「高いキャリア意識」の3つの活動や意識が、大学生の学びと成長に大きく関わっているということである。それが大学卒業後の職場での仕事の仕方にも影響を及ぼしているという結果も示されている。

当然、大学でも学生の学びと成長をしっかり実現する

ために、教室の中での授業改革に留まらず、この3つの活動や意識を高めることが重要になる。しかし、大学生になって一から身につけることは難しく、高校までの基礎が重要である。

「大学生のキャリア意識調査」の結果から、先の見えにくい時代において、学び成長する者のキャリア意識は高いという結果が出ており、特に「キャリア意識」が高い大学生は、中高生時代から将来のことを考え始めたという回答するケースが数多く見られた。そこで、高校2年生から大学卒業3年後まで、約10年間をかけて、5回の追跡調査を実施し<図表1>、高校時代にどんな学習・生活をして、どの程度のキャリア意識を持つ生徒が、どのような大学生になって、大学卒業後、どのようなビジネスパーソンとして社会生活を送るのか、そのパターンを解明するとともに、新しい時代における学校教育(高

<図表1>調査実施の流れ



＜図表2＞生徒タイプの特徴のまとめと男女別の割合

	生徒タイプ	特徴	学習	友だち関係	自尊感情	キャリア意識	割合 (%)		
							男子	女子	全体
1	勉学タイプ	よく学び、将来に向けて頑張り、個人の成長を実感している生徒タイプ	○	○	○	○	22.5	27.9	25.1
2	勉学ほどタイプ	準勉学タイプ	○		○	○	7.7	7.8	7.8
3	部活動タイプ	部活動を中心に高校生活を過ごし、良好な友だち関係や集団行動には適応しているが、勉強はあまりやらず、将来のこともあまり考えていないタイプ	×	○		×	28.9	26.0	27.3
4	交友通信タイプ	友だちと遊んだり通信したりすることが高校生活の中心であり、良好な友だち関係を築いていたり集団行動に適応していたりする。勉強はあまりしないが、将来のことは比較的よく考えているタイプ	×	○			9.7	22.0	16.1
5	読書マンガ傾向タイプ	読書したりマンガ・雑誌を読んだりして、ひとりで過ごすことが多く、友だち関係は弱く、自尊感情、キャリア意識は低いタイプ		×	×	×	3.0	1.5	2.2
6	ゲーム傾向タイプ	ゲームをしてひとりで過ごすことが多く、勉強はしない、友だち関係は弱い、キャリア意識も低いタイプ	×	×	×	×	12.7	2.1	7.3
7	行事不参加タイプ	友だち関係が弱く、自尊感情の低いが学校行事への消極的参加につながっていると考えられ、将来のことも考えられていないタイプ		×	×	×	15.5	12.6	14.1

(補足) 勉強と部活動を両立している生徒は「勉学タイプ」の中に多く含まれている。部活動をやりながら勉強をあまりしない生徒の多くは「部活動タイプ」に含まれている。

*全体には性別を答えたくないという回答した者を含む

校・大学・短大・専門学校等ならびにその接続)の役割(学校と仕事・社会との接続)についても明らかにしたいというのが本調査の目的である。

● 7つに分類できる ● 「生徒タイプ」のそれぞれの特徴

では、具体的に「学校と社会をつなぐ調査」の1時点目(高校2年生対象)の調査について、説明しよう。

1時点目の調査は、2013年10～12月、大学進学率約7～8割の高校の2年生(河合塾の資料から全国約1,500校を抽出)を調査対象の母集団に設定。教室での配布、インターネット、郵送等で16万5,687名に調査票への回答を求め、4万5,311名から回答を得た。

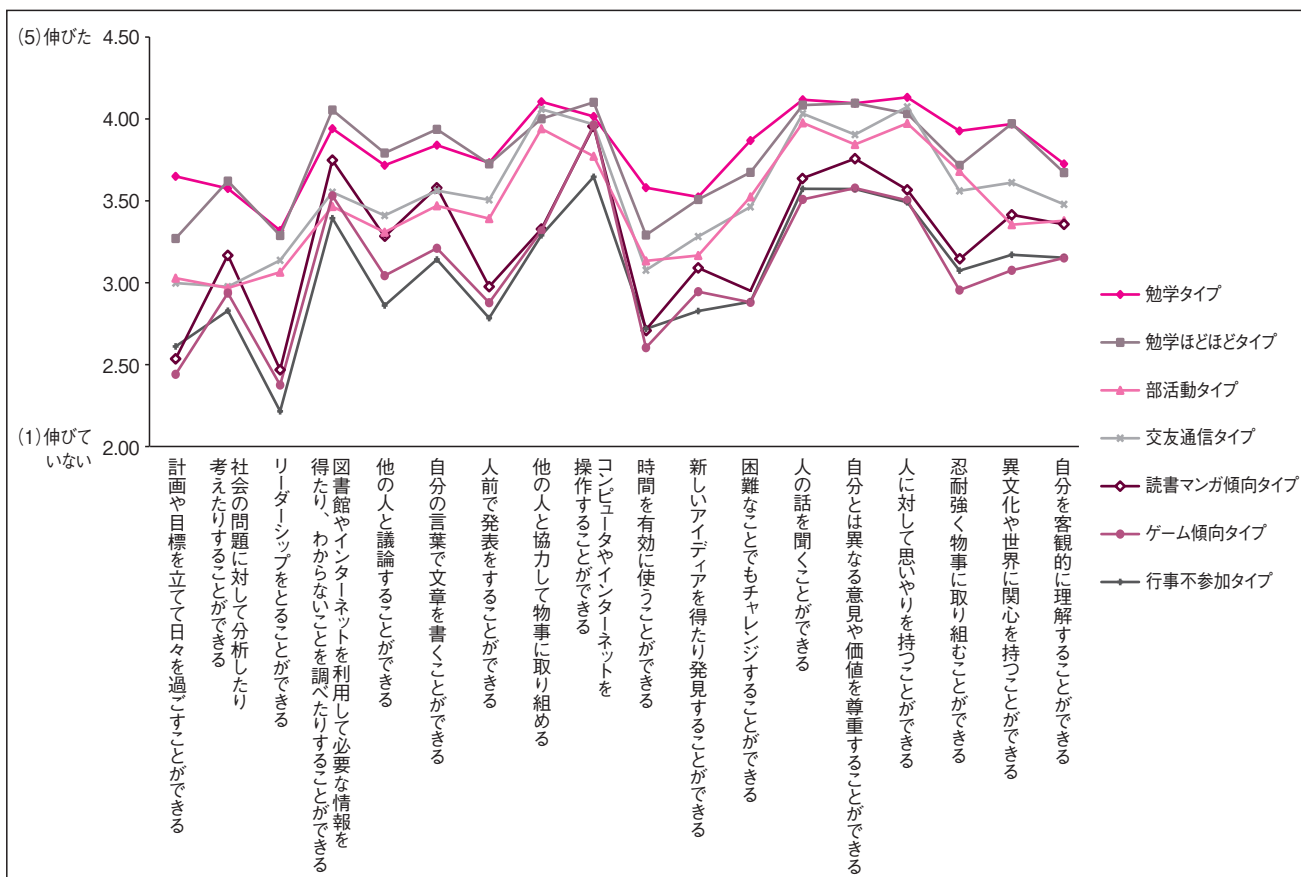
質問内容は「性別、学科、中高一貫校、スーパーサイエンスハイスクール(SSH)経験など(5項目)」「学校や日々の生活(16項目)」「部活動と学習との両立、アクティブラーニングの取り組み、生活の充実感(4項目)」「1週間の活動時間(平日・休日各12項目)」「友だち関係(9項目)」「技能・態度の獲得(18項目)」「自尊感情

(6項目)」「キャリア意識(9項目)」「進学や将来の職業、生き方について考える機会(3項目)」である。

回答回収後、1時点目では、キャリア意識に結びつく高校生の経験(学習や活動、友だち関係・自尊感情など)がどのようなものか、「生徒タイプ」ごとに分析を進めた。キャリア意識に関連させて「生徒タイプ」をつくったのは、それが大学入学後の学びと成長、ひいては大学での経験や職場での仕事の仕方に影響を及ぼす意識だと考えられるからである。従来の高校生対象の調査では、キャリア意識はほとんど質問されておらず、意義があるものとする。

まず、収集サンプルの中から、①平日の活動時間の合計が5.5～20.0時間であり、休日の活動時間の合計が5.5～25.0時間であること、②睡眠時間が3時間以上、の両方の基準に合致するものを分析対象とした(1週間の活動時間の合計が極端に長すぎる者、短すぎる者、未記入の者を除外)。その数は3万9,210名(収集サンプルの86.5%。男子1万8,601名、女子1万9,914名、答えたくない・未記入695名)となった。本調査は高校卒

＜図表3＞生徒タイプと技能・態度の獲得との関連



業後大学に進学して、大学を卒業後3年までの約10年間を追跡する調査であるため、「高校卒業後、(大学、短大、専門学校などに)進学する」と回答した3万7,448名を分析対象として抽出した。

次に、この3万7,448名の高校2年生を、平日・休日の1週間の過ごし方、学校や日々の生活、友だち関係、自尊感情、キャリア意識の観点から、非階層クラスタ分析を行い、生徒を7つのタイプに分類した。それぞれのタイプの特徴・男女別の割合は＜図表2＞の通りである。「交友通信タイプ」は女子、「ゲーム傾向タイプ」は男子が圧倒的に多い。ただし、それ以外では大きな男女差は見られなかった。

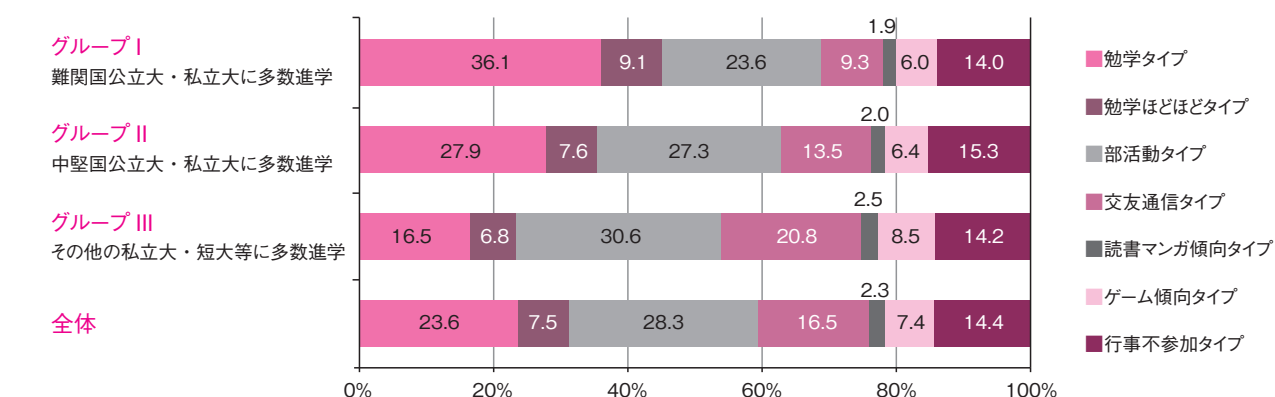
● 交友通信タイプ、部活動タイプは異なる背景を持つ人たちとのコミュニケーションに課題

生徒のタイプ別に各回答を詳しく見てみよう。＜図表3＞は、生徒のタイプと、昨今求められる技能・態度（ジェネリックスキルやコンピテンシー、21世紀型スキル）の伸びとの関連を示したものである。

これらの技能・態度の獲得は、全体的に「勉学タイプ」「勉強ほどタイプ」の得点が高く、次いで「部活動タイプ」「交友通信タイプ」が中程度の得点を示している。ただし、「部活動タイプ」「交友通信タイプ」は、友だち関係や集団行動に強いタイプのため、「他の人と協力して物事に取り組める」「人の話を聞くことができる」の得点は、「勉学タイプ」「勉強ほどタイプ」と同程度に高いが、「他の人と議論することができる」「人前で発表をすることができる」は高い値ではなかった。これは、友だちや家族など、相手のことがよくわかっており、曖昧な言語表現でも通じる相手とのコミュニケーションはできて、個々人の持つ背景が異なり、明確な言葉で説明することが求められる相手とのコミュニケーションには課題があることを意味している。友だち関係や集団行動が良好であることと、ディスカッションやプレゼンテーションができることとは別次元の技能・態度であるということだ。

現在、学校、特に大学での学習では「他の人と議論することができる」「人前で発表をすることができる」こと

<図表4>大学進学グループ別に見た生徒タイプの割合



※グループ分類は、河合塾の調査による

が重要である。これらの技能・態度の獲得には、PBLなど課題発見・課題解決型学習や、アクティブラーニング型授業の充実が重要になると考えられる。

また、「読書マンガ傾向タイプ」「ゲーム傾向タイプ」「行事不参加タイプ」は、自尊感情、キャリア意識の面が弱いとともに、技能・態度の獲得の項目についても低い値となっている。彼らの社会参加を促す工夫も必要である。

さらに、高校でよく言われる、部活動と学習の両立が生徒の成長に大きな影響を持つという見方について言及すると、本調査では、「勉学タイプ」の中に部活動と両立しているものが8割含まれており、生徒の回答状況を見ると、部活動をやりながら勉強をあまりしない生徒の多くは「部活動タイプ」に分類されている。「勉学タイプ」の中で部活動と両立している生徒は、技能・態度の獲得も良好であり、部活動と学習の両立が生徒の成長に大きな影響を持つことが実証された。しかし、生徒が部活動と学習を両立していると回答しても、回答状況から「部活動タイプ」「交友通信タイプ」など他のタイプに分類される場合は、技能・態度の獲得の得点は、「勉学タイプ」より低い。“たとえ勉強はあまりしていなくても、部活動を頑張っていれば大丈夫”ではなく、やはり高校における基本は勉学であり、「勉学タイプ」であることを前提として、その上で部活動を両立させることが理想といえる。

- 短期間の受験勉強で難関大学に入学した
- 学生の態度・技能、キャリア意識は大丈夫か

<図表4>は、高校の大学進学グループ別に「生徒タイプ」の割合を示したものである。本調査は、大学進学率7～8割の高校が対象だが、そのうち難関大学への進

学実績が高いグループでは「勉学タイプ」が多く、グループⅢの2倍以上を占めている。

注目されるのは、「読書マンガ傾向タイプ」「ゲーム傾向タイプ」「行事不参加タイプ」が、大学進学実績に関係なく、同程度の割合で見られたということだ。「行事不参加タイプ」はどのグループにも14～15%程度存在する。

しかも、難関国公立大・私立大に多数進学するグループⅠでも、「勉学タイプ」が多いものの、「部活動タイプ」～「行事不参加タイプ」が過半数を占めている。もしそうした高校生が、短期間の受験勉強をして、難関大学へ進学しているとしたら、大学生になってからの学びと成長、技能・態度の獲得、キャリア意識は大丈夫なのか、高校生でできなかったことが大学生でできるようになるのだろうか。この点については、先に述べた「勉学タイプ」における部活動と学習の両立が、さまざまな側面で肯定的な特徴を示してきたが、これら大学生になってからの力強い学びと成長につながるのかということとあわせて、2015年に実施予定の2時点目（大学1年生）の調査とその結果が待たれるところだ。

なお、本調査は、協力校に結果をフィードバックしているが、基本的に個別の生徒の指導に役立てるというよりは、自校の特色を把握するためのデータとして活用してもらい、その特色を踏まえて、カリキュラムや授業改革に反映されることを期待している。

詳しい内容については京都大学のホームページ
<http://www.highedu.kyoto-u.ac.jp/trans/>
 をご覧ください。